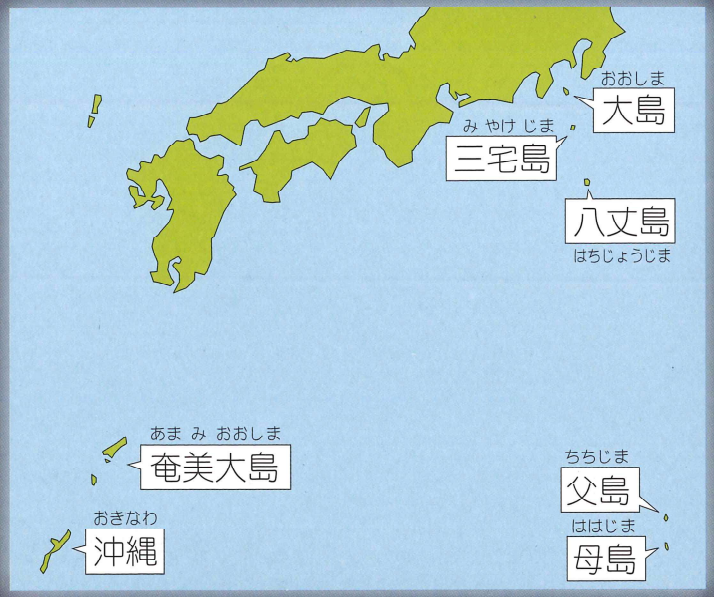
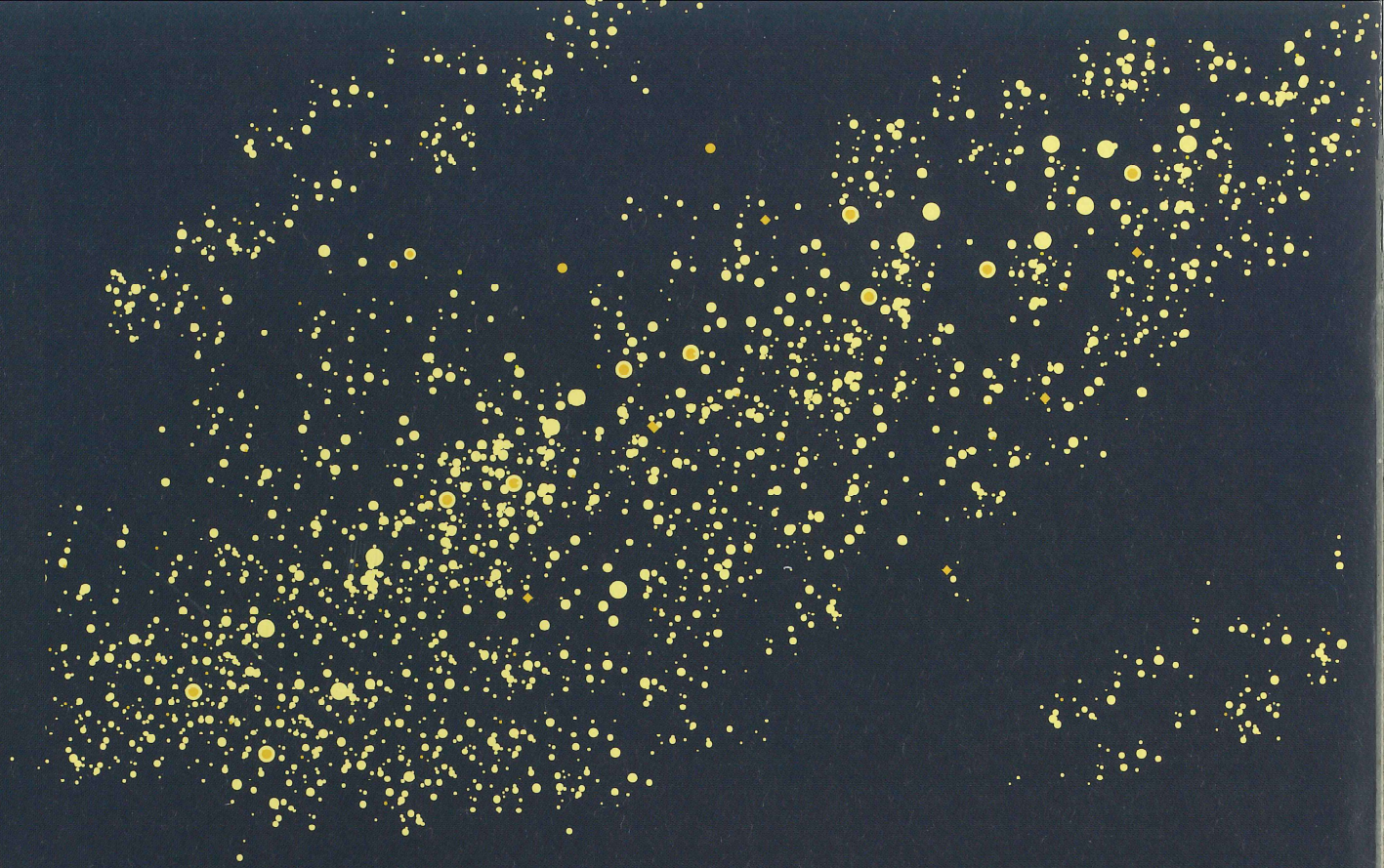
United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization
World Heritage Convention
2012

環境省
Ministry of the Environment

島ネコ マイケルの大引っ越し

ヒトとペットと野生動物が共存できる社会をつくる人たちのお話





ネコはおなかがすいていました
ここは小笠原(おがさわら)、母島(ははじま)

ネコは遠い日のことを思い出していました

遊びあきると
母ネコの
胸(むね)にすがって
おっぱいを
飲んだこと

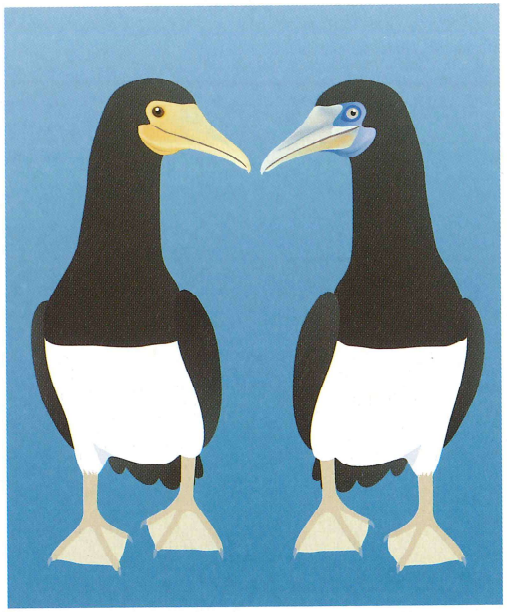
母ネコの舌が
気持ちよかったこと

一家は人間の家の庭先で暮らし
母ネコは人間から餌(えさ)をもらっていたこと

ある日目覚(めざ)めると
ひとりぼっち
森の中に
捨てられていたこと

ネコは食べ物を探して歩き続けました

崖(がけ)のそばにたどり着いた時
黒い大きな鳥が
右に左に揺(ゆれ)れているのが見えました



カツオドリ *Sula leucogaster*

小笠原諸島で代表的な海鳥。翼を拡げると1.4ｍになる大型種です。くちばしのつけ根の色が雄雌で違い、雄は青色で、雌は黄色です。鳴き声は「グアッ、グアッ」。羽ばたきと滑空を繰り返しながら飛びます。上空で餌を探し、頭から豪快にダイビングしてトビウオやイカなどを穫ります。離礁の崖に小枝や草などで簡単な巣を作り、親鳥は交代で卵を暖めます。真夏の子育てですから、幼いヒナが太陽に当たりすぎないよう親鳥は体で日よけになります。

大きな鳥は
はばたくことなく
崖っぷちに降り立ち
長い翼を折りたたんで
こちらを向きました

カツオドリです

ネコはその鳥の大きさにたじろぎ
体を縮めて固まりました

眠(ねむ)っているカツオドリを見ているうちに
空腹(くうふく)であることを
思い出したネコは
おじけづいた気持ちを忘れ
ひとっとびに
その鳥に食いつきました

あっけなくつかまったカツオドリを少し離れたやぶの中へ運び
ネコは夢中で食べました
次の夜もその次の夜も、カツオドリをつかまえては同じやぶの中に運び
翼を残して食べました
巣穴の中でじっとしているオナガミズナギドリも
かたっぱしから食べました

写真：ネコが食べ残したオナガミズナギドリの翼

オナガミズナギドリ *Puffinus pacificus*

南方の海域に広く生息する、翼を広げると1m ほどの中型の海鳥です。空気抵抗が低いグライダーのような細長い翼で、羽ばたかずに長時間飛び続けることができます。繁殖期以外は海上で生活します。魚群の上に群れをつくる習性があり、漁師が漁場を探す助けになります。夜間、繁殖地では「ミャウーー」という猫のような声で呼び合います。人の立ち寄らない草地や裸地に、くちばしと足で穴を掘って巣を作り、集団繁殖します。自然にできた石灰岩の空洞も利用します。卵は雌雄で暖め８月初旬にヒナが孵ります。数日するとヒナは置き去りにされ、親鳥は夜に帰ってきて餌を与えます。夜も飛ぶ種類で、父島や母島の集落地に夜間不時着することが多いです。

南崎（みなみざき）のトリというトリを
食べつくしてしまったネコは
またおなかがすいてきました

そこへ
いいにおいが漂（ただよ）ってきたので
ネコはそのにおいの元をたどってみました
そこには見たことのない箱の中に
おいしそうなものが入っていました

ぱしり！

大きな音がして入り口の戸が閉まり
ネコは檻の中に閉じ込められました

ネコはわけがわからず
やたらめったら転がり、もがき、ひっかき
けりました
鼻からも爪からも血が流れましたが
痛いとも思わず、恐ろしさにつつまれていました

朝が来て
人間がやってきて
ネコを檻ごと背負い港へ運びました
船に乗り、陸に上がりました
父島です
また船に乗りました

夜が来て、朝が来て、建物だらけの騒々しい場所に着きました
東京の町でした
ネコは疲れに疲れて気が遠くなりました

「マイケル、マイケル」女の人の声が聞こえます
「マイケル、起きたの」「マイケル、ごはんよ」

どうやら「マイケル」というのが
ネコの名前のようです

マイケルはどうぶつ病院のケージの中に
いました

マイケルと呼ばれることにも慣れました
人間にさわられると
ビクリとこわばっていた体も
今は顎の下をなでられると
母ネコになめてもらった
幼い頃を思い出します

食べ物を探して一日中ほっつき歩く暮らし
暑い日差(ひざ)しに焦(こ)がされ続ける暮らし
水たまりを見つけた時だけ
乾(かわ)いた喉(のど)を潤すことのできる暮らし
名前のない暮らし

そのすべての暮らしと別れ
マイケルは人間に飼(か)われることも悪くないと
感じはじめています

島ネコたちのその後

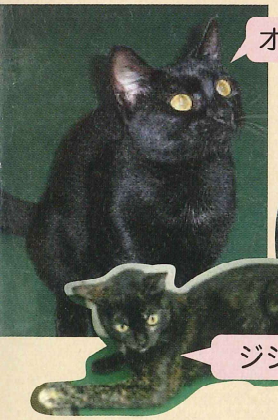
マイケルの後も母島南崎からネコは引っ越して来ました。そして、父島からも。

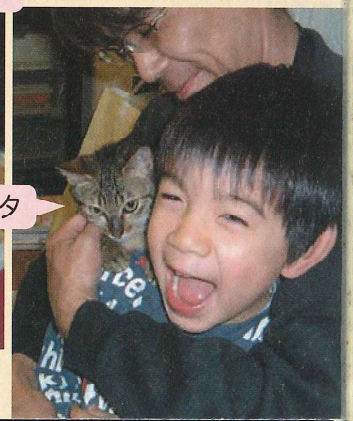
小笠原諸島には、アカガシラカラスバトという、世界でここにしかいないハトが生息しています。地上に巣をつくることが多く、地面を歩いて餌を採るこのハトたちが、ネコの影響を受け、数を減らしている恐れがあります。そこで、ハトの父島での繁殖地、東平でもネコの捕獲が始まりました。

父島、母島のネコたちは、東京の動物病院にやって来た時、ほぼ全頭、お腹に寄生虫がたくさんいて、痩せていました。皮膚炎を起こしていたり、糖尿病であることが分ったネコもいます。島ネコたちは、まったく人を寄せ付けず、餌をもらう時にさえ、人に攻撃して来ました。

受け入れ病院のスタッフたちは、ネコが人との生活の中で安心して生きられるよう、根気よく話しかけ、人や動物と対面させ、少しずつ飼いネコとしての暮らしに慣らしてゆきました。

ほとんどのネコは、1ヶ月ほどですっかり落ち着き、病院内を散歩して今や看板ネコになっていたり、スタッフの家族ネコになっていたり、「ひと目惚れ」されて、一般家庭にもらわれて行ったネコもいます。





おとなのための「解説」

■世界自然遺産地域・小笠原諸島

小笠原諸島は、東京都心の南1000kmに浮かぶ島々。この島々は、一度も大陸とつながったことがない「海洋島」です。このため、現在島に生息している生き物の多くが、本州や東南アジア、オセアニアなど様々な地域から自力で「泳ぐ」か「飛ぶ」か、偶然にも「流される」または「風によって飛ばされる」などしてたどり着いた、ごく限られた生き物を祖先としています。そして、隔絶された島の中だけで独自に進化した固有の生き物の楽園になっています。海水に弱いカエルやミミズはいませんでしたし、ほ乳類は空を飛べるコウモリだけでした。鳥のフンや羽に紛れて運ばれたカタツムリがミミズの代わりに土を作り、植物の種は鳥やコウモリが運び、とても特別な、世界でここにしかない生態系がつくられました。

このような特殊な環境の中で、今なお生き物たちの進化の過程がみられる独特の生態系は世界にも類が無い価値を持つとして、2011年6月に小笠原諸島は世界自然遺産となりました。

■小笠原の自然に迫る危機・外来種問題

小笠原に最初に人が移り住んだのは1830年のことです。それまで、島にはネズミもネコもヤギもブタもいませんでした。しかし、人の生活に伴い家畜やペットとして持ち込まれたり、資材などに付着したりして様々な生き物が島々にやってきました。

これらの外来種のうち、自然環境を破壊してしまうものを侵略的外来種といいます。小笠原では外来種が猛威をふるい、世界で唯一の「海洋島の特殊な生き物・生態系」を存亡の危機にさらしています。例えば、アカギやモクマオウなどの外来樹木が小笠原固有の森林を侵食しています。ヤギやネズミの食害などにより、世界に残り数株という絶滅寸前に追い込まれている植物もあります。ネズミは貴重なカタツムリを食べます。父島・母島の昆虫類も、グリーンアノール（トカゲ）やオオヒキガエルの食害で絶滅したものがあるといわれています。

もちろんこれらへの対策が進められていることが評価されて世界遺産に登録されたのですが、これからも侵略的外来種との戦いは続いていきます。

■侵略的外来種としてのネコ

ネコは人間の良きパートナーで、昔からペットとして飼われていますが、固有の生き物に深刻な被害を与える侵略的外来種の1つです。ネコはとても有能なハンターで、永年人間と生活していても、その性質は変わっていません。したがって、小笠原では容易に自然に分け入り、山の生き物を捕って暮らすことが出来ます。小笠原のノネコは山域で高密度に生息しているクマネズミを主食にしながら生活していると考えられます。しかし、ネズミだけではなく、時には固有鳥類や海鳥も捕食するため、ネコはこれらの希少な鳥たちを絶滅させる大きな原因の1つとなっています。

■母島南崎で実際にあったこと

この絵本に描かれた「マイケル」の話は、実話をもとにしたお話です。小笠原には父島と母島の2つの島に人間が住んでいます。その母島の最南端が、この話の舞台「南崎」です。南崎には、小笠原の有人島で唯一の海鳥繁殖地があり、母島の人々にも愛されてきた場所でした。カツオドリとオナガミズナギドリの繁殖が毎年確認されていましたが、その数が減り、まったく繁殖がなくなり、そしてたくさんの海鳥の死体が発見されたのです。

小笠原で鳥類の調査研究を行っているNPO法人小笠原自然文化研究所がこの死体を調べたところ、死体の羽軸に残る歯形から犯人としてネコが疑われました。そこで自動撮影カメラを仕掛けたところ、カメラに写っていたのがこの絵本の主人公「マイケル」だったのです。マイケルは、自分より大きなカツオドリをくわえていました。

2005年、この事態を重く見た環境省、林野庁、東京都は、NPO法人小笠原自然文化研究所や母島の住民の

2005年カツオドリをくわえたマイケル

南崎のネコ柵

方々の協力を受けてこれらのネコを捕獲することにしました。しかし、このとき問題となったのは捕獲後のネコの扱いです。山に戻すわけにはいかず、野生で育ち人に馴れていないネコは引き取り手も見つかりません。外来種だからといって殺処分するとすれば、島内でネコを飼っている人をはじめ、社会的な合意が得られないおそれがありました。

このような状況の中で、小笠原で捕獲されたネコを引き取ってくれたのが東京都獣医師会に所属する獣医師さんたちでした。「鳥は小笠原でしか生きられないけれど、ネコは都会でも幸せになれる。」という獣医師さんの言葉から、ネコも鳥も幸せになる、この絵本のネコの引っ越しプロジェクトが始まったのです。

その後母島では、皆が協力して南崎に「ネコ侵入防止柵」を建設しました。現在は環境省が柵のリニューアルや管理をしています。ネコの捕獲も継続して行っています。2014年からはカツオドリも戻ってきて繁殖が確認されています。オナガミズナギドリは順調に回復し、2017年には、85ヵ所の巣穴が確認されるほどの集団営巣地になっています。

■父島東平でのネコ捕獲事業

南崎での初めてのネコ捕獲の後、新たな問題が持ち上がりました。父島東平におけるアカガシラカラスバトの危機です。

アカガシラカラスバトは、ネコ捕獲事業が始まる前はこの地球上に30～40羽程度しかいないとも言われる幻の鳥でした。このハトを襲おうとしているネコが目撃さ

カゴ罠設置作業

ねこまち

れ、日常的にこのようなことがあるのではないかと考えられました。

そこで南崎の成功を機に、2008年、東平でも行政の担当者と住民のボランティアにより、ノネコを捕獲することにしました。その後2010年1月からは、環境省による父島全域における通年の捕獲が始まりました。捕獲されたネコたちは「ねこまち」で一時飼養された後、東京都獣医師会に所属する病院に引き取られ、・馴化（飼いならし）をされます。2005年のマイケル捕獲から2017年10月までに父島・母島で捕獲された650頭以上のネコたちが、おがさわら丸で1000kmの旅をして、新しい飼い主さんのもとで暮らしています。こうした人々の努力により、ここ数年アカガシラカラスバトの生息数が増加してきています。島の暮らしの中でハトを目にする機会が増え、「あかぽっぽ」の愛称で島の人々に親しまれる存在になっています。

■ネコ対策のこれから

小笠原のネコ対策は捕獲だけではありません。東平での捕獲を契機に関係機関が集まり「小笠原ネコに関する連絡会議」が発足しました。小笠原では、村の条例で飼いネコを登録することになっており、2010年にはマイクロチップの装着が義務となりました。島内に飼い主のいないネコが増えないようにするため、飼いネコの不妊去勢を徹底し、屋内飼養を推進するなど、飼い主さんには責任ある飼い方をお願いしています。2017年現在、飼いネコの登録率や不妊去勢率、マイクロチップ装着率は概ね9割となっており、まちなかで捨てネコはもちろんノラネコを見かけることも格段に少なくなりました。このことは全国的にも非常にまれな事例と言えます。

小笠原でネコを飼うということは、小笠原の自然環境のためにも大きな責任を負わなくてはならないのです。また、不妊去勢や屋内飼養は、ネコの病気や事故を減らし、寿命を延ばすとも言われており、ネコにとっても良いことが多いのです。

山域と集落の対策が進んだ結果、父島の山域ではネコが随分減りましたが、残ったネコは罠にかかりにくく、まだ時間がかかります。全島の捕獲ができていない母島の対策もこれから考えなくてはなりません。

島内での対策に加え、島外の引き取り協力者（獣医師さんと飼い主さん）を増やすことも重要です。人と関わるネコという外来種の対策は、島の中、外、1000kmの距離を超えて、どちらの協力も不可欠なのです。

■動物対処室のオープン

2017年5月小笠原世界遺産センター内に、「おがさわら人とペットと野生動物が共存する島づくり協議会」が運営する動物対処室がオープンしました。獣医師が常駐し、外来種等による被害・影響を受ける野生動物の初期治療やリハビリの補助、ペットの適正飼養指導や健康診断を行なっています。また、山域で捕獲されたノネコのケガや体調管理などもできるようになりました。以前は衰弱した子ネコが捕獲された場合はそのまま命を落とすことが多かったのですが、動物医療の初期治療体制が整備されたことで救うことができました。今では新しい飼い主さんも見つかり元気に暮らしています。

ケガをしたネコの治療

■最後にお願い

私たちは、自然と生き物の命を守るために活動しています。しかし、小笠原の貴重な自然を守るため、大変残念なことですが、環境省や関係機関は、ネコ以外のヤギやトカゲなど多くの外来種を殺処分しています。この島でしか暮らせない多くの命を守るため、仕方なく行っていることです。外来種とはいえ、決して命を粗末にしているわけではありません。食べるために動物を殺す、作物を守るために害虫を殺すことと同じように、とても大切な理由があることは、ご理解いただけたと思います。

もし、お子様に聞かれたときは、生き物の命を守ることの大切さを伝えてあげて下さい。この趣旨が誤って捉えられ、理由もなく生き物を殺すことを当たり前と感じる大人を育ててしまうことを恐れています。

外来種は悪い生き物ではありません。悪いのは持ち込んで放置した人間です。小笠原にお住まいの方や来島される方には、植物や昆虫も含め、今後新たな外来種を持ち込まないようお願いします。

2016年南崎で繁殖したカツオドリ親子

島のアイドルあかぽっぽ

野生動物の処置風景

島ネコ マイケルの大引っ越し　　2018年3月　発　行

編集・発行：環境省関東地方環境事務所
編集協力：NPO法人小笠原自然文化研究所・NPO法人どうぶつたちの病院
写真提供：NPO法人小笠原自然文化研究所・(社)東京都獣医師会
イラスト・デザイン：斉藤　たまき
協　　力：(社)東京都獣医師会・小笠原ネコに関する連絡会議(小笠原総合事務所国有林課、東京都小笠原支庁、小笠原村役場、小笠原村教育委員会他)、小笠原自然観察指導員連絡会、小笠原母島観光協会、父島・母島のボランティアの皆様、小笠原海運株式会社

お問い合わせ先：環境省小笠原自然保護官事務所
〒100-2101　東京都小笠原村父島字西町　小笠原世界遺産センター内
電話　04998-2-7174　FAX　04998-2-7175